The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 中国人就学生の学習動機の変遷に関する理論と日本語学習の実態 |
| Author(s) | 中井, 好男 |
| Citation | 大阪大学, 2010, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/57853 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【34】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 中　井　好　男（なかい よしお） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（文　学） |
| 学　位　記　番　号 | 第　２３４８８　号 |
| 学位授与年月日 | 平成22年３月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当<br>文学研究科文化表現論専攻 |
| 学　位　論　文　名 | 中国人就学生の学習動機の変遷に関する理論と日本語学習の実態 |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　青木　直子<br>（副査）<br>教　授　渋谷　勝己　　教　授　石井　正彦 |

## 論文内容の要旨

本論文は日本語学校で成績不振のため再履修（同一のレベルを繰り返すこと）になった中国人就学生を対象とし、これらの学生の学習動機がどのような要因に影響されて変化するのかを明らかにしようとしたものである。本論文は５部構成となっており、第一部は４章、第二部は５章、第三部は７章、第四部は６章、第五部は５章からなっている。図表、付録も含めＡ４判、251ページ、400字詰め原稿用紙で750枚分に相当する。

第一部第一章では本研究にいたった申請者の教師としての現場での経験について述べている。第二章では、日本への留学生の増減に関する動向や日本政府の取り組み、最近の中国人留学生に見られる変化などを示している。第三章では、中国人日本語学習者や第二言語教育における学習動機に関する先行研究について概観し、第四章では研究史の中の本研究の位置づけについて述べている。

第二部第一章では、質的研究について概観し、質的研究方法を採用する必要性を述べるとともに、申請者の修士論文で採用したグラウンデッド・セオリー・アプローチと本研究の骨格となる理論を導く修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）について概観する。第二章で調査協力者と調査方法について示した後、第三章では中国人再履修者を対象に行ったインタビューデータの M-GTA による分析結果を提示している。第四章では分析結果を理論のストーリーとして示し、第五章でそれを考察している。

第三部は、対象を３名に絞ったケース・スタディを扱っている。第一章では、第２部で得られた理論の不足点を補うために授業観察によるデータが必要であることを説明し、第二章では方法論と調査対象および分析方法について述べている。第三章は３名のケースの個別の記述である。第四章ではこれらのケースの比較を行い、考察している。第５章ではケース・スタディの結果を第二部で得られた理論へ統合し、理論の精緻化を試みている。

第四部では、教師へのインタビュー・データを M-GTA によって分析している。第一章では、本研究に教師の視点を取り入れる必要性について述べる。第二章では調査方法と分析方法について述べ、第三章では分析結果を示している。第四章で分析結果に基づいた理論のストーリーを提示し、第五章ではそれを考察している。第六章では、教師のデータによって得られた理論を第二部と第三部で構築した理論に組み込み、中国人就学生の学習動機の変遷に関する理論を完成させている。

第五部は、全体の考察とまとめである。第一章でこれまでの分析結果を概観し、第二章でできあがった理論の詳細について述べている。第三章はその考察、第四章は日本語教師と日本語学校に対する提言である。第五章は本研究全体のまとめを述べ、今後の課題を指摘している。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は多くの日本語学校で起きている中国人就学生の成績不振という問題に正面から取り組んだものである。これらの問題に関して日本語教育関係者は従来、やる気がない、学習態度が悪いなど学習者側の要因に原因を帰属させてきたが、問題解決の糸口は見いだせないままであった。本研究は、当事者である再履修者と教師がそれぞれの立場からこの現象を語るインタビュー・データと申請者による授業観察データというトライアンギュレーションを行って、問題の核心に迫っている。このような手法をとった研究はこれまで皆無であり、まずそのことが高く評価される。これらのデータの分析によって、段階的に理論を精緻化させていくプロセスは読み応えがある。さらに分析結果として、来日後の就学生の気持ちの変化とその原因とともに、成績不振者の生まれる原因の中には教師の対応も含まれているにもかかわらず、教師は成績不振の原因を学校の運営方針に帰属させて問題の解決を放棄しているという実態を明らかにしたことには、非常に大きな意味がある。成績不振は解決不可能な問題ではなく、教師の行動を変えることによって解決できる可能性があることを示しているからである。

本研究に弱点がないわけではない。まず３名だけのケース・スタディのデータを M-GTA の理論に組み込むことが妥当であったかという問題がある。ケース・スタディは個々のケースの複雑な有り様を複雑なままに描き出せるという利点はあるが、その中に見いだされた要素はどれほど一般的なものであるかはわからない。M-GTA を採用するなら、もう少し多人数を対象とした授業観察も必要だったのではないか。さらに、第五部の提言を実際に実行してもらうためにはもう少していねいな議論が必要だっただろう。最後に、この研究を第二言語教育の中の動機づけ研究というより大きな文脈に位置づけることができなかったことは返す返すも残念である。内容的にはこの分野の研究に新たな知見をもたらすことのできるものであるにも関わらず、そうした議論がなされていないからである。しかし、これらの弱点は本論文の博士論文としての価値を減じるものではない。よって、本論文を

博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。